ねことときみ。

竜胆まひる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ねことときみ。

【Ｎコード】
Ｎ０２０９Ｙ

【作者名】
竜胆まひる

【あらすじ】
猫を助けた午後、女の子から告白された。
その少女は名前を名乗らなければ、自分が誰なのかも教えてはくれない。
けれど、俺を好きだという気持ちには嘘はなくて……
俺は彼女に惹かれていった。
彼女がどうして、俺を好きになったかも知らないままで。
彼女と俺の、ふんわり甘く切ない初恋の物語ーー……

ぷろろーぐ

大丈夫、と。
口の中で、何度も繰り返す。
繰り返し、繰り返し、囁く。
大丈夫。
涙を我慢出来るなら、きっと。
まだ、大丈夫。
きゅっとシーツを掴み、涙を我慢する。
その表情は虚ろで、人の温かみがない。
陶器人形のように、綺麗で温度のない顔であった。

（大丈夫、だいじょうぶ）

（こわくない、なかない、泣いてない、つらくない、大丈夫……だもの）

言い聞かせる、というよりは洗脳するように自分に囁く。
真っ暗闇の部屋で、泣く事さえ許されない。
泣いてはいけないと、彼女は自分の心に暗示をかける。
目を逸らそうとも、心の痛みからは逃れられない。
もう、心は痛みに喘いでいた。
耐えきれない痛みに、崩壊寸前でーーそれでも、彼女は目を逸らしていた。
気づかない振りをやめても、心を救済する術などないのだ。
だから、現実から目を逸らした。
でも、本当は胸が苦しくて、誰かに助けて欲しかった。
優しく、優しく。
この、底の見えない闇から、掬い上げて欲しかった。

一瞬でもいい。
光が、見たかった。

（誰かーーだれでも、いいから……おねがい）

助けて、と一言。
たった一言さえ、彼女の口から紡がれることはなかった。
声にならなかったのだ。
声を失ったかのように、彼女の声帯は震えない。
彼女はもう、諦めているのだ。
この闇から逃れられない、と。
ずっと、このまま。
闇の中で溺死するんだ。
きっとーー

「ーー大丈夫かっ？」

えっ、と声が漏れた。
今まで、どんなに頑張っても震えなかった声帯が、今震えたのだ。
低い、低い青年の声。
優しく、優しく、囁いた。
その瞬間、心臓を抑制出来なくなったのがわかった。
どきどきどくどく、と。
全身が震えた。
もう、彼女にはどうすることも出来なかった。
耳元で、心臓が煩いくらいに高鳴って、言葉が出てこない。
心臓が壊れてしまいそうだ。
じわりと、頬に熱が……。

「もう、大丈夫だからな。……よく頑張ったな」

かあぁっと。
全身が火照っていく。
闇の中、光なんて何も無いのに彼女はあまりにも眩しくなって瞼を閉じた。
頬を赤く色づかせ、幸せそうにはにかんだ。
それも束の間、彼女はひどく困ったような顔した。

（どうしよう）

（どうしよう、ボク、この人のことーーー……）

シーツを抱きしめる手には、熱が孕まれていた。

出会いのミルフィーユ

夜が明ける少し前の時間に助けた猫は飼い主に引き取られたらしく、病院にはいなかった。
どうやら、授業が終わると同時に駆け出したのは無駄な労力だったらしい。
だけど、それでよかったのだろう。
猫だった飼い主が迎えに来てくれた方が嬉しいに決まっているのだから。
藤堂真樹(とうどうまさき)はすぐに迎えに来るだなんて優しい飼い主なのだろうとほんの少し嬉しくなっていた。
それから、帰ってから何をしようかと考えながらぼんやりと歩く。
実家から苺が大量に送られて来たのを思い出し、苺ジャムでも作ろうかと考えていたーーその時。
甘い香りがふわりとした。
小さな子供にだけ与えられるお菓子のような、とても愛らしい甘い香り。
こっそりではあるがパティシエを目指す真樹は振り返られずにはいられなかった。
今までのお菓子よりも、ずっと惹き付けられる、この香り。

(うわぁっ……)

振り返れば、より甘い香りが真樹を魅了した。
花のように甘い香りがふんわりとした。
夢に包まれているように穏やかで、その香りにどきどきと心臓が鼓動する。
いや。
それだけが理由ではなかった。

世界にはこんなにも無垢なものがあるのだろうか。
真樹はぼんやりと思った。

光を溶かした新芽の柔らかく淡い色をした双眸とばちりと視線が重なった。
すると、光をふわりと落としたような肌をほんのりと色付けた。
真樹は思わず息を呑んだ。

「あのっ」

それは少女だった。
真樹は少女から瞳が離さなかった。
何故なら背中に羽が生えてないのが、逆に不思議なくらいに愛らしい少女だったからだ。
少女は蜂蜜色の髪をふわっと空に舞わせ、固まる真樹に近付いてきた。
ぷっくりと膨らんだ小さな唇から発された声すら、ほんのりと甘い。
ああ、きっと彼女は砂糖菓子で出来ているのだろう。

「……何だよ」

真樹の口から飛び出たのはぶっきらぼうな言葉だけであった。
真樹は元々口下手で、話すのが得意ではない。
その欠点の要因は真樹の容姿と言っても過言ではないだろう。
”先天性白皮症”
世間にはアルビノと言った名の方が有名であろう症状の事である。
真樹はメラニンの生合成に関わる遺伝情報が欠損しており、先天的にメラニンが欠乏している。
乳白色の肌。

真っ白な髪。
緋色の瞳。
真樹の場合、メラニンが殆どないので瞳は眼底部の血管の色が透けて赤く見え、白髪の髪も光に当たれば辛うじて銀に見えるようになっている。
その容姿はアルビノと言う言葉が浸透した今でも忌避される理由になっている。
その上、真樹は三白眼で普通にしていても睨んでいると誤解される損な特徴を持って生まれた。
生まれ持った容姿のせいで周りから畏れられていたせいでコミュニケーション能力が養われず、その結果口下手になってしまったのだ。
そんな真樹には目の前に立っているような愛らしい女の子に話しかけられる経験などない。
真樹はかつてないほど緊張していた。

「ボク、っ……」

少女は今まで真樹が関わってきたどんな人物とも違う反応を見せた。
真樹に話しかけられたと認識するや、少女は途端にかぁあぁと赤くなっていった。
ほんの僅かに視線を落としてから、ふわりとまた視線を上げた。

「好き、ですっ」

心臓がどっと跳ね上がった。
真っ直ぐに絡まる視線に、真樹は息がぐっと詰まる。
甘く、淡い瞳が。
真樹の鮮やかな緋色の瞳を見ている。

「な、なして……」

「え……？」

「い、いや。何でなんだ？　初対面、だよな？」

先述述べたように真樹は誤解されやすい。
それ故に今まで告白とは無縁だったので、真樹は驚きのあまり故郷の言葉が零れた。
真樹の中身がどうであれ、彼の外見は嫌煙されるだけの美しさを持っていた。
口下手と不器用さが拍車をかけたと言えなくもないが、本来持つ優しさや誠実さを知ってもらう前に嫌われたり怖がられたりすることが多々ある。
口は災いの元というが、口がなくとも災いを呼ぶらしい。
何とも皮肉な世界である。

出会いのミルフィーユ2

そんなある意味不幸な人間である真樹に、少女はこくこくと素直に頷いた。
それから、真樹の瞳を見つめて愛おしそうに微笑んだ。

「でも、好きなんです」

真樹は絶句した。
少女の瞳は真剣そのもので、あまりに美しかったから。
真樹は言葉が出てこなかった。
真樹がじっと見つめていたせいか、少女は恥ずかしそうに瞳を逸らした。
そして、あわあわとしたかと思えば、また真樹を見つめる。

「ボクは……上総(かずさ)と言います」

「……名字は？」

「必要、ですか？」

「ああ」

肯定すると、上総と名乗るこの少女は少し困ったようにたじろいだ。
怪訝そうに眉を顰めた真樹は、上総から予想外の切り返しを受ける。

「先輩のお名前は？」

「藤堂真樹だけど」
「ならボク、藤堂がいいです。ううん、藤堂がいいです！」
「はあ？！」
大きく目を見開き、驚愕する。
すると、上総は軽やかなステップで真樹から遠ざかった。
そして、こちらに振り返り……。
「大好きです、……大好きなんです、貴方が」
そう言った上総の顔があまりにも切なげで、胸がきゅうっと痛くなる。
真樹への愛おしむ気持ちと切なそうな表情が混ざり合った上総の顔は、酷く愛らしかった。
「一年、一年だけでいいんです。一年だけ……、時間を共有してくださいっ！」
縋り付くような瞳は迷子の子供のようだった。
上総の叫びに、真樹は無下には出来なかった。
真樹はぼりぼりと頭を掻いてから、小さくため息をついた。
上総はそれを了承の反応だと受け取ったのか、嬉しそうにはにかんだ。
そして、駆け出しーーて行かなかった。
「先輩先輩っ、リヒトがお世話になりました！」
いつの間にか上総の肩に乗っていた白い猫を見せ付けるように立

ち、上総はまたもや叫んだ。
そして、漸く気が済んだのか、立ち去っていった。

「何だったんだ……？」

告白だった、んだよな？
そう心の中で問いかけるが答えは返って来ない。
真樹は生まれて初めての告白に内心戸惑っていた。
真樹は友人すら片手で数えられるほどである。
ましてや、女の子から告白されるなんてもってのほか。
先述通り、真樹は女の子のみならず、男からも怖がられているかなり浮いた存在なのだ。
真樹のコンプレックスはアルビノを取り除いても、外見にある。
普通にしているだけなのに「どうして睨むんだよ」っと言われる三白眼。
長身という、本来は利点となる要因でさえその外見が故に威圧感を醸し出してしまう。

無愛想なのがいけないのかと思い、一度だけ試しに笑顔を作ってみたこともあった。
しかし、逆に怖がられてしまい、昼休みに泣きながらジュースを献上されてしまった。
真樹はそれ以来作り笑いはしなくなった。
休み時間に席に女の子達が屯していたこともあった。
しかし、真樹を見るや否や青ざめて蜘蛛の子を散らすように逃げていってしまった。

上総のような女の子は初めてだった。
怖がるどころが普通に接し、その上好意を抱いてくれるだなんて。
初めて出会った女の子。

（そういえば、時間を共有して欲しいってどういう意味なんだ……？）

真樹は先程の告白が脳裏に過り、気恥ずかしくなりながら疑問を抱いた。

好きだと言われた。

けれど、付き合って欲しいとは言われなかった。

一言も、言ってはいなかった。

どうしたらいいんだ。

嬉しさの次に、悩みが降って来た。

真樹は険しい顔で頭を抱えただった。

出会いのミルフィーユ3

よく晴れた金曜日。
朝特有の爽やかな空気が桜と戯れ、空色と桃色が遊ぶ姿が綺麗だった。
そんな爽やかな朝とは裏腹に真樹は険しい顔をしながら、登校した。
教室に入るとまだ人はいない。
早すぎたのだろう。
中は伽藍としていた。

「まーくん、おはよっ！」

「おう」

「あれぇ？　何かあったの？　眉間のシワがどるるーんって倍増だよ！」

「……意味わかんねえよ」

声をかけてきたのは野々村純（ののむらじゅん）であった。
純は真樹の数少ない友人である。
とろんとした垂れ目と女の子さながらの愛らしい容姿と華奢なのに、身長は172というアンバランスな男で、アホ毛をぴょこぴょこさせながらよくわからないことを口にすることが多々ある。

「昨日、……告白された」

その瞬間、純のアホ毛はぴょんッ！と立ち上がる。
それと同時に純の叫び声が響いた。

「こく、こ、告白?！　どど、どど、どうしよう、まーくんっ！」

「何がだよ」

小動物の耳のように跳ねた両側の髪が生きているかのように震え立つ。

真樹はまたか、とため息をついた。

「もしもだよ、もしも！　例えば詐欺だったら、まーくんの心がばりーってなってそれで、どーんてなってぽっくりいったら！　……やだよおっ、まーくん死んじゃらめええええええええ」

「いや、勝手に殺すなよ」

純は極度の心配性であり、そして告白という文字だけでここまで思い込めるほどの妄想癖を持ち合わせている。

頭の弱そうな話し方から察せれるように、大変頭の弱い子なのだ。

頭を痛める真樹に救いであり、また違う方面で頭を痛ませる者が次の瞬間現れた。

「馬鹿。オレの心の親友はそんなに弱くないよ。ね?」

それは静かで品のある声だった。

まるで空に話しかけられているような錯覚を齎せるような透き通った声。

声のする方へと振り返ると、眉目秀麗な顔が見えた。

彼もまた真樹の数少ない友人、雲雀ヶ丘冬馬（ひばりがおかとうま）だった。

冬馬は見た目も態度も、何処か冷たさがあり、近寄りがたい空気を持っていた。

しかし、何故か中身は熱血系の美少年である。
無表情で氷のように冷たい目をしているにも関わらず、だ。
漆黒の髪は絹糸のように流れ、天の川が鏤められているように輝きを放っていた。
その髪以外はドイツ人である母親の血を強く受け継いでおり、日本人離れした容姿をしている。
肌も黄色人種の日本人とは違い、白く美しい。
長い睫毛が影を落とす透き通る杏仁型のアイスブルーの瞳が、真樹を捕らえる。

「お前らなあ……」

彼らのような人間を残念なイケメンと言うのであろう。
二人共容姿は優れているのだが、中身があまりにも個性的なのだ。
だが、真樹を怖がらないという個性的な一面も持ち合わせている。
それは真樹にとっては有り難かった。
例え、彼らから与えられる苦労が多くとも。
唯一とも言える友人なのだから。

「それよりさ、告白してきた女の子について話してよ」

「構わないが……」

「真樹を好きになるなんてよっぽど見る目ある子なんだろうね、興味湧いてきたよ」

声に抑揚はなく、美しいが無感情な人形そのものだったが、本当に興味があるのだろう。
いつもなら授業中でも当然のように広げられている夥しい数の楽譜が一枚も広げられていない。

ロボットのように無感情で淡々と話す冬馬だが、真樹は知っている。
彼がどれくらい熱血系なのかということを。

出会いのミルフィーユ４

真樹は昨日の事を自分の中で整理しながら、二人に話した。
拙い言葉ではあったものの二人は話を聞き終わると少しの間沈黙を生み出した。
その沈黙に真樹は顔が赤くなるのが自分でもわかった。
こんなことは、初めてでどうしたらいいのかわからない。
顔をさりげなく俯かせることで耐えるしかなかった。

「見知らぬ美少女から告白、ね。真樹じゃなかったら、妄想は大概にしろって言ってるところだよ」

「んー、でもでも上総だけじゃさ、どこの誰かわかんないよね」

「だね。制服来てたら話が早いんだけど……」

二人にそう言われ、真樹は上総の服装を頭の中に思い浮かべる。
絵本で見るようなフランスのお嬢様みたいな、ふわふわとした服装だった。
ミルフィーユみたいな段フリルのワンピースで、アンティークレース。
森ガール、というやつ。
彼女の柔らかな雰囲気にお似合いの服装であったと真樹はこっそり思う。

「ふわふわした、……ミルフィーユみたいな服だった」

「おんにゃのこはみーんな、ふわふわだからなー」

「私服だけでわかるような奇抜なやつ、ここにはあまりいないしね」
わかっていたことながら、ため息が零れた。
名前と顔くらいしかわかっていないのだ。
人物を特定するのは難しい。
真樹が住んでいるこの街は数年前に作られた、第三の都市聖瑞花（ごもじゆ）。
今から２０年程前、世界最大の震災が首都東京を襲った。
当時全権力を握っていた東京の壊滅により、日本という国は停止した。
それ以降、権力を分散させるべきだという声が高まり、大阪府が大阪都になった。
財政的には赤字がなく、黒字で運営出来ている名古屋……愛知県こそが首都に相応しいとの声も上がったが、東京からの距離が近く分散させるには不適当だと却下されてしまう。
財政も二重行政を止めたことにより、赤字は少なくなり、今となっては黒字を示すようになっている。
しかし、問題もあった。
大阪と東京は犬猿の仲。
東京は大阪を品がなく野蛮な騒がしいけちん坊だと毛嫌いし、大阪は東京を気取っており冷徹で傲慢な血も涙もないと毛嫌いしていた。
二つの都市は歩み寄ろうとはせず、どちらが優れているかを議論するようになった。
それを諌めたのはかの有名な椿家の鶴の一声であった。
”我らが作る第三の都市に従事せよ。”
東京も大阪も文句など一つも漏らさず、従った。
今の日本には椿家に逆らうものなどいない。
ただでさえ不況の煽りを受け負債が跳ね上がっていた時に襲いかかった震災。
そのせいで膨れ上がり手のつけようがない国の負債全てを肩代わりし一族である。

千兆がはした金に思える負債を肩代わりしただけではない。
ロシアと韓国との領土問題を解決に導き、沖縄のアメリカ軍についても対策を公示、ＴＲＲ問題も上手く立ち回り日本に有利なルールを作り、福祉国家スウェーデンにも引けを取らない福祉国家へ改革を成功させたのだ。
国民からの支持率は２０年間一度たりとも９割を下回っていない。
一部の人間は独裁だと批判するが、国民は間違った民主制よりも正しい独裁の方がいいと耳を貸さない。
そもそも、言葉を悪くすれば民主制は国民で”独裁者”を選ぶ制度だ。
　その素晴らしき独裁者が作り上げた都市は日本各地からあらゆる方面の天才や、家柄の良い人間が集められた。
そして、一般家庭からも小数ながらも募集され、形成された聖都と呼ばれる都市となった。

「まぁ、この馬鹿が心配するような類じゃないだろうね」

「わ、わかんないじゃん！」

　食いかかってきた純に曇りない冷めた瞳で一瞥する。
そして、ため息をついた。

「あのな、真樹は一般公募で来た家庭だし、そもそも聖都にそんなのいないだろ」

「で、でもっ！」

　引き下がらない純に冬馬は面倒臭そうに眉を潜めた。
その時、予鈴が鳴った。
時計の針は授業開始まで後５分を指していた。

長い間話し込んでいたようだ。

「いたとしても、真樹じゃなくてアンタをカモる。な、真樹？」

「……ノーコメントだ」

授業の用意をしていた真樹は純を一瞥してから、否定出来ないと思った。

しかし、それを本人に告げるのは憚られて、そう答えた。

「ひどいよぉっ！　野々村は結花ちゃん一筋だもん！」

「先生、でしょ」

ぎゃあぎゃあと喚く純の頭に出席簿がヒットする。

担任の梅崎結花（うめざきゆか）だ。

彼女はかれこれ三年前から純に熱烈に想われている可哀想な国語教師だ。

妄想癖がある純に好かれるなんて……と真樹は同情しているのだが、怖がられているのでどうしようもない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0209y/

ねことき み。

2011年12月11日16時45分発行